様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：４２６６５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２０５４

研究課題名（和文）日本演劇史における歌舞伎と宝塚歌劇の影響研究

研究課題名（英文）influence research of kabuki and the Takarazuka revue in the histry of Japanese theater

研究代表者
吉田　弥生（Yoshida, Yayoi）

文京学院短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：００３８９８７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：ともに日本で生まれた音楽劇である歌舞伎と宝塚歌劇の影響関係を作品分析を通じて考察し、日本演劇史の一水脈の視点をもって考察した。演者のジェンダー、座付作者の存在、スターシステムの在り方など、相反しながらも共通性をもち、劇場提供、技術提供などの面で密なる関係性も持つ百年であったことが具体的に解き明かすことが出来た。さらには近代における日本演劇に置いて、東アジア演劇世界における位置も確認出来た。

研究成果の概要（英文）：The influence relation between kabuki and the Takarazuka revue which is the musical produced in both Japan was considered with the viewpoint of one seaway of the history of Japanese theater through work analysis. The state of existence of a performer's gender and the author working for a particular theater and a star system, etc. were able to have similarity, though it conflicted, and it was able to explain them concretely that it was 100 years which also have dense relationship in the field of theater offer, a technological tie-up, etc. Furthermore, it put on the Japanese theater in modernization, and has also checked the position in the East Asia theater world.

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：挑戦的萌芽

キーワード：歌舞伎研究　近世・近代芸能史　宝塚歌劇研究　比較演劇研究　大衆文化研究　東アジア文化研究　舞踊学

１．研究開始当初の背景

今日までの宝塚歌劇研究はどちらかといえば単眼的な研究が多くなされてきたように思われる。たとえば音楽劇としての面から、ジェンダー論からの視点で、また母体企業の研究など。また、海外の研究者からもシェイクスピアの翻案作への着目などが発表されてきた。だが、いまだ日本演劇研究の一分野として認められるには至っていない。おそらくそれらの研究には、史的考察、資料的考察、全体的な考察、複眼的な研究が欠落していたからである。また、その娯楽性豊かな存在から研究対象とすること自体が異端視される傾向も、残念ながら研究の発展を妨げてきたと思われる。

一方、創立以来「座付作者」を抱えて新作脚本を次々と産出し、公演内容と出演者情報を提供する出版物を刊行してきたために膨大な文字資料を築き、映像・音響の資料も存在することがこの研究に光明を与えている。

宝塚歌劇研究の現況に類似して、歴史とともに資料をもちながら研究環境がしばらく整えられなかった芸能の代表格も、かつての歌舞伎研究ではなかっただろうか。歌舞伎研究は資料の整備をし、民俗学など既存の研究手法にならいつつ、戯曲（作者）研究、地域研究、比較演劇へと深化と拡大化を遂げて日本演劇の一大分野を構築した。私の場合には、宝塚歌劇もこの「先人」の手法に見習うことから、従来達成できなかった、史的、資料的、総合的、複眼的な研究ができると発意し、歌舞伎の、特に劇作術研究を試みてきた立場から着手することにした。

２．研究の目的

宝塚歌劇は、創立者・小林一三の意志のもと歌舞伎を意識して成立されたこと、影響関係があったことは一三の手記や講演記録によって既に明白である。

上演史を調査すると、初期の作品には歌舞伎をそのまま歌劇化した戯曲も見出される。そうした初期の歌舞伎作品の歌劇化という創造が、その後の「日本物」作品の創作へ影響を与え発展させたわけだが、歌舞伎の影響は「日本物」の創作にとどまらず、劇構造やスターシステム、作品の創造全般におよぶと考えられるのである。

現在、宝塚歌劇の上演作品には再演ものが増え始めている。宝塚歌劇の素晴らしさは、一カ月を超す上演期間の大劇場公演と十日前後の上演期間で行う小・中規模劇場公演（宝塚のバウホール、大阪のシアター・ドラマシティ、東京の日本青年館や天王洲銀河劇場など）のほか、これと併行して上演される年二回程度の梅田芸術劇場公演と地方劇場公演（名古屋の中日劇場・福岡の博多座公演）、全国ツアー公演のそれぞれにオリジナル作品が書かれていることだといえる。これは世界の演劇を見渡してみても驚異的なことだと考えられる。もちろん、地方公演の場合には近年の作品の中から秀作を組み合わせた再演はあるが、ショー作品などは「・・・Ⅱ」として再構成するなど、オリジナル作品を作る心意気を感じさせたものだった。ところが、おおよそ今世紀に入ったあたりから、純粋なオリジナル作品の減少、再演の増加傾向が見られてきた。

理由は三つ考えられ、第一には、公演機会が増えたこと。先に述べたように東西の本拠地劇場以外の上演機会があり、その他

にコンサート、ディナーショーが併行し、一つの組が三つに分散して出演することもある。ほぼ専属の演出家たちは各々が独立した自分の仕事を持って活躍している。昭和四十年代頃までは、これが少し違っていた。演出家たちには徒弟制度があった。一人の演出家が抱える助手は六人、チーフ、セカンド、サード・・・と順序があった。チーフは何かあれば代行をするポジションだが、最下の助手は稽古場に入ることもできず、演出家が制作に集中するための世話などに従事した。ポジションを上りつめて卒業、独立するまでにしばらくの時間を要したが、もの作りをじっくり学び、自作を手掛ける時までの個性の引出しを作ることができた。現在は助手時代を早く切り上げて独立した演出家として活躍を始める。そうでなければ、増加した公演機会を回していけない。その代わり、もの作りの学びと個性の引出し作りの期間が少ないための苦労を、制作を通してすることとなる。だが、それでも増加した公演機会への対応は難しく、過去の作品の再演で賄わなければならない。セットや衣裳の新作をしなくても済む点もコストカットにつながっている。現在の宝塚歌劇は、もの作りの現場というよりも企業組織の運営にその運命を任せた状況のようである。今はなくなった演出家の徒弟制度は、まるで生産力があった時代の歌舞伎の作者部屋制度（立作者、二枚目、三枚目・・・見習いから立作者まで上るうちに、芝居の作り方を学ぶ）とよく似ていた。歌舞伎の制作も江戸以来の作者制度が無くなり、坪内逍遥や岡本綺堂、北條秀司といった戯曲家一人による作品が書かれる時代が訪れ、やがて新作が書かれなくなって古典化した。同じ道をたどるという決まりはないが、決まりがないからこそ、歌舞伎研究者には古典化の過程を彷彿とさせられる。

第二に、純粋なオリジナルではない作品にヒットが続いたこと。第三には、百年を経て、再演可能な佳作の財産が出来たこと。歌舞伎は今日で四百十年の歴史があるが、古典化の道を歩み始めたのはおおよそ成立後三百年のちである。私は以前に自著『江戸歌舞伎の残照』（平成 16 年（2004）、文芸社）のなかで、現代の歌舞伎のレパートリーがしだいに狭まり、上演を繰り返す黙阿弥作品を「江戸歌舞伎の残照」とたとえたことがある。歌舞伎より早いスピードでこの時期を迎えつつある宝塚歌劇。近い将来「残照」に頼るばかりの演劇にならないためには何をすべきか。。〈一水脈〉の視点は、現況として見られる、その速度の高まりを指摘するもの。研究を開始した目的はそこにもあった。

３．研究の方法

まずは、創立者・小林一三の目指した演劇が歌舞伎の何をモデルとしたかを考察し、歌舞伎の宝塚への影響を追究するとともに、歌舞伎作品を素材とした歌劇作品の脚本を比較分析しようと考えた。次に、昭和中期以降現在までの歌舞伎作品を素材とし、さらに舞踊要素を強めた日本物作品の分析と、宝塚歌劇が日本演劇と世界の演劇に影響を与えた状況について分析研究を進めた。また、歌舞伎が宝塚におよぼした影響を日本物に限らず、劇構造やスターシステム、興行形態とその周縁においても表れていることを映像資料も交えて分析した。その体系化は今後の課題となった。収集した資料情

報をデータベース化し、宝塚研究資源の情報ネットワークの基盤を構築することも引き続き課題である。

歌舞伎と宝塚歌劇の影響関係の分析結果から日本演劇史における国民的かつ伝統的な演劇成立の連鎖性が明確になり、資料の情報ネットワーク化によって学術的利用を高めて研究の可能性を拡大できれば、宝塚歌劇研究は、間もなく日本演劇研究の一分野として位置づけられる。具体的かつ体系化された成果の公表は特異性ある日本文化のひとつとして世界的に認知させる意義をもつこととなると確信したのである。出来る限り早期に複眼的・総合的な研究を行っていくためには、一個人の研究には限界がある。分担研究者の細井尚子氏には「宝塚歌劇の比較演劇的考察・分析」を役割とし、特に御専門の東アジア地域の演劇からの考察をご担当いただいた。研究協力者の中野正昭氏には「近代大衆演劇及び音楽劇と宝塚歌劇の比較分析」を、田畑きよ子氏には「宝塚歌劇団制作面の変遷」を、阿部さとみ氏には「宝塚歌劇舞踊の評価基準の変遷」を、濱口久仁子氏には「歌舞伎舞踊と宝塚歌劇の舞踊の比較・分析」を役割としてご担当いただいた。所蔵機関の連携は至難であり、研究期間中に情報ネットワークの構築は築けなかったが、専門分野を違える研究者が集まり、共同研究を継続することで、より複眼的・総合的な研究を織りなすことができたのではないかと思っている。

４．研究成果

ともに日本で生まれた音楽劇である歌舞伎と宝塚歌劇の影響関係を、作品分析を通じて日本演劇史の一水脈の視点をもって考察した。演者のジェンダー、座付作者の存在、スターシステムの在り方など、相反しながらも共通性をもち、劇場提供、技術提供などの面で密なる関係性も持つ百年であったことを具体的に解き明かすことが出来た。さらには近代における日本演劇に置いて、東アジア演劇世界における位置も確認出来た。

特に最終年度においては、歌舞伎が宝塚歌劇におよぼした影響を日本物に限らず、劇構造や興行形態とその周縁においても表れていることを分析、体系化、公開研究会や出版を通じて成果の公表に至り、今後の研究の土壌を築くことができた。

小林一三は「我が国の誇るべき歌舞伎劇」にならい、目指し、匹敵する演劇として世界に立ち向かえる国民劇に創成しようとした。新派・新劇など近代以降におこった演劇が歌舞伎を旧派・旧劇と否定して進んだのに対し、宝塚歌劇は歌舞伎を肯定して出発したのであった。私は宝塚歌劇の初期の隆盛は、間違いなくこの歌舞伎との連続性に成功の鍵を秘める。そして、歌舞伎を宝塚歌劇に「書き替えた」作品とは、まず音楽は洋楽を用いる。所作もそれに合わせた。せりふは現代語に直す。テンポを速める。そして身の丈長く、容姿の美しい女性が演じる。書替えには作り手の労苦と出演者による発展の二段階があると思われるが、特に作・演出の段階における工夫には、伝統から革新を生み出す飛躍的で豊かなアイディアが見られた。一ひねり二ひねりすることで古典が近代化され、それが宝塚歌劇としてのスタンダードをも創成していった。

〈古典の近代化〉という点においては類似の手法で創造したものに三代目市川猿之助（現・猿翁）の「スーパーカブキ」があ

る。三代目猿之助が宝塚歌劇に影響を受けたことは、スーパーカブキの音楽、衣裳、せりふほか演出の随所に色濃く表れると見える（ちなみに俳優祭では『ベルサイユのばら』を演出)。つまり、近世江戸の歌舞伎に影響された宝塚歌劇が近代におこり、現代歌舞伎に再び影響を与えている。歌舞伎と宝塚歌劇の連続性がここにも証明されている。そもそも、歌舞伎の本質的な部分を考えてみれば、それは「かぶく(傾く)」精神である。その心には、まっすぐに世を生きられない哀しさがあり、その姿は異様を極めたもの。宝塚歌劇作品に描かれる主演男役（トップスター）演じるヒーローの多くは「かぶきもの」の心を持っていないだろうか。総スパンコールの衣裳に特大の羽を背負う姿は世間（宝塚歌劇を観劇したことがない、関心がない、あるいは関心を持つ機会や状況にいない方々）からみれば異様の極みなにものでもない。ところが、宝塚歌劇の中にあっては、それはなにもおかしくない。むしろ美の極致の表象である。

歌舞伎は元禄期に初代市川團十郎が創始した荒事、隈取に力紙、真っ赤な裸身に縄飾りを背負う姿が賞賛されたように、歌舞伎の世界にあっては、なにもおかしくないのである。見得をきる歌舞伎、銀橋から二階席を睨みつける宝塚の男役はともに強調のためのストップ・モーション、クローズアップ手法である。ともに音楽劇（歌舞伎は邦楽・宝塚歌劇は洋楽）であり、ともに何よりも大衆の、観客の心を魅了した国産の演劇。「男だけ」「女だけ」の俳優についてはそれぞれの成立事情の違いからとはいえ、日本人は、それを伝統として（結果として）崩さない道を選んだのだといえる。そこに美学を見出し、それゆえの美があるからである。本研究の最大の成果は、そのように歌舞伎と宝塚歌劇の百年が、あたかも相反するように見えて、ひじょうに密なる関係があったことを紐解いたことにある。

５．主な発表論文等

[雑誌論文]（３件）

・研究代表者

①「小林一三の歌舞伎観―宝塚歌劇草創期における歌舞伎の影響―」(「文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要　12」2013 年２月）

②論文「「忠臣蔵」世界の宝塚歌劇化」(「文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要　13」2014 年２月）

・研究分担者

①細井尚子 「百貨店と演劇興行から見た東アジアの中の宝塚歌劇」

「日本近代大眾娛樂市場之特性―從百貨公司與少女歌劇談起－」 『臺閩民間戲劇國際學術研討會論文集』閩南文化中心 pp.393-419（中国語）・421-452（日本語）2013 年

[学会発表]（４件）

・研究代表者

①「歌舞伎の影響作品に見る宝塚歌劇の想像力」(日本演劇学会　大会テーマ「宝塚歌劇と世界の音楽劇」2013 年 6 月、於・共立女子大学）

②「日本演劇史における宝塚歌劇百年の伝統と革新」(公開研究会「宝塚歌劇考」2014 年１月 11 日開催、於・早稲田大学大隈講堂小講堂）

・研究分担者

①「東アジアの演劇史上における〈近代〉としての宝塚歌劇」(日本演劇学会　大会テ

ーマ「宝塚歌劇と世界の音楽劇」2013 年 6 月、於・共立女子大学）
②「シンポジウム　宝塚歌劇考―日本演劇史において、アジア演劇市場において」（公開研究会「宝塚歌劇考」2014 年１月 11 日開催、於・早稲田大学大隈講堂小講堂）
[図書]（１件）
①『歌舞伎と宝塚歌劇―相反する、密なる百年―』（2014 年３月 28 日、開成出版）
[その他]
2013 年度、宝塚歌劇団編集部より依頼を受け、雑誌『歌劇』へ「宝塚歌劇考」の題で学術研究の側面から宝塚歌劇について連載。
６．研究組織
（１)研究代表者
吉田　弥生（YOSHIDA、Yayoi）
文京学院短期大学※・英語キャリア科・准教授
研究者番号：　００３８９８７６
※2014 年３月の閉学により、2014 年４月より所属変更（文京学院大学・外国語学部）
（２）研究分担者
細井　尚子（HOSOI、Naoko）
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授
研究者番号：　４０２１９１８４